

第十二回「いのちの授業」大賞 受賞一覧

【大賞（知事賞）】

作品名 「いのちの期限」

筆者

小杉 菜々子

伊勢原市立成瀬中学校 三年

授業実践者

伊佐 拓真

伊勢原市立成瀬中学校 教諭

【教育委員会賞】

作品名 「いのちって何だろう？」

筆者

村上 湊太

湘南学園小学校 四年

授業実践者

星野 嘉住

湘南学園小学校 教諭

【神奈川県新聞社賞】

作品名 「いのちの授業」

筆者

越井 実音

湘南学園小学校 四年

授業実践者

重田 唯子

湘南学園小学校 養護教諭

【tvk賞】

作品名 「捉え方で変わる気持ち」

筆者

古田 陽世莉

相模原市立相陽中学校 一年

授業実践者

橋本 美樹

相模原市立相陽中学校 教諭

【神奈川県PTA協議会会長賞】

作品名 「わたしのはなし」

筆者

牧野 清音

横須賀市立長井小学校 二年

授業実践者

石橋 直生

横須賀市立長井小学校 教諭

【ともに生きる社会かながわ憲章賞】 作品名 「生きている奇跡、出会った奇跡」

筆者

向井 美結

川崎市立宮内中学校 三年

授業実践者

高瀬 椋平

川崎市立宮内中学校 教諭

【優秀賞】

筆者

高橋 李緒

川崎市立下布田小学校 二年

授業実践者

高橋 智美

保護者

【優秀賞】

筆者

森山 心陽

伊勢原市立竹園小学校 三年

授業実践者

森山 瑠美

保護者

【優秀賞】

筆者

清水 葵

伊勢原市立伊勢原中学校 二年

授業実践者

陳 央仁

医師

【優秀賞】

筆者

藤森 昂

神奈川県立横浜立野高等学校 二年

授業実践者

田中 浩平

講師

【優秀賞】

筆者

須山 ゆら

神奈川県立相原高等学校 三年

授業実践者

相澤 拓朗

神奈川県立相原高等学校 教諭

大賞(知事賞)

「いのちの期限」

伊勢原市立成瀬中学校

三年 小杉 菜々子

私には、生まれてくることのできなかった姉がいます。私が生まれる六年ほど前に、姉は陽の光をみることもなく天に旅立ったそうです。両親や私の周りの人たちは心の底から姉のことを想い悲しんだそうです。この話を聞いた時、私は「不運だな」とそこまで重く捉えることはありませんでした。私のこの考えが浅はかだったと気付けたのは私の好きだった祖父のおかげです。

祖父は私が小学四年生の頃にガンという病にかかりました。発見が遅かったため、祖父には病院の先生からのちの期限が言い渡されました。「長くても一年もつかどうか。」「この言葉を聞いたとき私の心のどこかがぎゅっと締め付けられました。それはいつかの古傷が痛んだような感覚でした。それからは私にはいつもと変わらない時間が流れました。日に日に痩せ細ってゆく祖父は薬の副作用も顕著になっていきました。抜けてしまった髪、くぼんだ頬、浮き出た血管、そこには私の知っている大好きな祖父の面影はありませんでした。

次第に病が進行し自分の力で呼吸することもままならなくなりました。一日中ベッドの上で横になり細い管につながれた祖父はただただいのちの期限がやってくるのを待つ日々を送っていたのかもしれない。私が祖父母の家を最後に訪れた日、母は私を祖父が寝ているベッドの側まで誘導しました。「来てくれたよ。」と母が声をかけると、祖父はもう力も残っていないはずなのに一生懸命に私にほほ笑みかけました。その二時間後、祖父は眠るように天へ旅立ちました。あの笑顔は一生忘れることはありません。後に聞いた話ですが祖父は細い声で「ありがとう」「ごめんね」と何度も何度も繰り返していたそうです。祖父の遺影を見る度に「もっと生きていたかった」という祖父の強い願いを思い出します。あの笑顔のおかげで私のいのちに対しての浅はかだった考えが変わりました。

私には生きること諦めかけた時期がありました。もう何もかもが嫌になってこんな命捨ててしまえと何度も思いました。そんな私を救ったのは私の大切な人からの言葉でした。「生きてくても生きられない人はたくさんいる。生きる希望をなくした人もいる。それでも皆生きている。何かしらの不安や問題を抱えながらも必死に生きている。だから君にもできるはず、自分のペースで生きていこう。」と、なぜだかこの言葉を聞く度にあの好きだった祖父の最期の笑顔が脳裏に浮かびます。そうして私はもう一度「生きたい」と思える

ようになりました。

生物である以上いつかのちの期限はやってきます。生まれた瞬間からのちの期限はどんどん減っていきます。そもそも私の兄弟のようにその期限のスタートラインにすら立つことのできない人、祖父のように期限を言い渡される人、急に期限を迎えてしまう人などたくさんいます。人間は自ら命を絶つ不思議な生き物です。だからこそ、今私が生きられていること、それは幸運なことです。そして、いのちというものはとても儂いものです。今、生きられていること、それは誇っていいことです。胸を張っていいことです。そう私に気付かせてくれたあの言葉と二つの身近ないのちの体験と共に私は生きていきます。私は、私の「いのち」と胸を張って生きていきます。私のいのちの期限がやってくるその瞬間まで。

「いのちって何だろう？」

湘南学園小学校

四年 村上 湊太

僕は、「いのち」について考えたことがあっただろうか。「いのちを大切に」「限りあるいのち」「尊いいのち」などとよく耳にするし、自分でも当たり前のように思っていた。また、学校で「いのちの授業」を受けて性について、また、いのちの誕生について習い、なんとなく理解できたように思う。でも、そもそも「いのちって何だろう？」考えれば考えるほどよく分からない。分かるのは、始まりがあり、終わりがあるということ。そして、いのちは一回きりだということ。生まれることも死ぬことも、間近で経験したことのなかった僕は、いのちの授業を通じてその始まりについて触れることができた。一回目の授業では性について学び、大きくなるにつれ、男女の体つきはどう変わっていくのかを知った。二回目には、おなかの中に赤ちゃんがいる先生が来て、いま不安なことや楽しみなこと、また、おなかの中の赤ちゃんの動きなどを話してくれた。おなかの中の赤ちゃんの重さを野菜で表して説明してもらい、少し命の始まりについて実感が湧いた。さらに、育児休暇をとっている先生とオンラインでつながり、子

どもを育てることがどんなに大変かを話してくれた。おなかに赤ちゃんがいたり、幼い子どもを育てている先生たちの話を聞き、無事赤ちゃんが生まれるのは奇跡だということ、そのために周りの人は全力でサポートしなければいけないのだということを感じた。

ところで、僕は夏休みの始めに、「じゅげむの夏」という本に出会った。この本の主人公は僕と同じ小学校四年生の親友四人組。その中の一人に、筋ジストロフィーという病気を患っている「かっちゃん」という少年がいる。この病気はだんだん筋肉が衰えていき、最後には心臓の筋肉もうまく動かなくなり、やがて死んでしまう恐ろしい病気だ。親友たちは、いのちの終わりが自分より早くきてしまうかっちゃんの「やりたいこと」をするために手を尽くす。でも、その姿は「やってあげる」ではなく、ごく自然な「一緒に楽しいことを経験したい」という気持ちから生まれたものだと思った。ここで僕は疑問がわいた。「いのち」は平等じゃないのか？ かっちゃんと、その他の子どものいのちは、健康も与えられた時間も、平等ではない気がする。

僕の弟は、自閉症と知的発達症をもって生まれた。意思疎通が難しかったり、幼稚園も小学校も、通えるところが限られてしまう。僕はたくさんの選択肢があるのに、弟は限られてしまう。同じいのちなのになぜだろう。限りあるいのちの「時間」やその「過ごし方」に大きな差ができてしまう現実を、僕はまだ理解できない。大人になったら分かるのだろうか？ 何かを経験した

ら？

最初に思った、「いのちって何だろう」という疑問の答えはま
だ出ない。でも、いのちの授業、じゅげむの夏、そして僕の弟を
通じて自分なりに出した答え。それは、一人一人が、自分に与え
られた時間の中で、できる限り幸せになれる方法を考えながら、
そして助け合いながら生きていけばいいのではないかと
いうことだ。

神奈川新聞社賞

「いのちの授業」

湘南学園小学校

四年 越井 実音

けつろんから、私が生まれたことは、

「ものすごくすばらしい出来事。」

ということですよ。

約三億個の精子のうちの一個と卵子が出会い、私という命が始まりました。

お母さんのおなかの中で十ヶ月間成長していく私。そしてその間、お母さんも体の変化があつて不安になつたりすることもあつて、うれしいだけではなく、いろいろな事に気をつけてすごしていたのです。

私が生まれた時のことを聞いたら、

「うれしくてうれしくてなみだが出た。」

と言っていました。十ヶ月の間、大切に毎日をすごして、やっと顔が見れたよるこびでむねがいっぱいになったのだと思います。

私は今、十才です。これから思春期に入り体の中や外が変化してくると学びました。変化することは少しこわく感じましたが、ただれにでも起こることなのだ、心のじゅんぴが出来ました。ま

た、女の人と男の人では体の作りがちがうので変化もちがいます。人間の体と心の変化を知る事が大切です。知っていれば、思いやりにつながるからです。

お父さんは、お母さんが生理でつらい時よくお皿を洗ったり、湯たんぽをわたしたりしていました。それは、体の変化の知しきがあるからだと思いました。私も、これから助けられそうです。

命が始まり、次の命を作るための体の変化があつて大人になって年をとつて命が終わる。

生きている今を大事に、自分を大切に人も大切に生きていきます。

私は、自分をだきしめて

「ありがとう！」

と言いました。

「捉え方で変わる気持ち」

相模原市立相陽中学校

一年 古田 陽世莉

みなさんは、ケア帽子を被っている人を見てどう思いますか？
私は、前まで「病気の人かな、可哀想」そう捉えていました。
六月八日。カナダ行き飛行機に母と姉、いとこと乗り出発しました。これは、母が癌と診断され、残り少ない時間を母の古い友人と再開して一緒に過ごすための旅行です。

母は、抗癌剤の副作用で髪が抜けてしまい、それから外出ではウィッグを被るようになりました。しかし、旅行ではケア帽子を被って生活するようになりました。

羽田空港から出発する前、パスポートの顔写真と一致するか確認するための機械を通らなくてはいけませんでした。その機械の注意書きには帽子をはずさよう書いてありました。母は帽子を被って挑戦してみました。が認証されませんでした。なので母は、帽子をとってやってみることにしました。そのまま認証されるまで待っていると、日本人の女の人が母を見て気の毒そうな顔をしていました。母がそれに気づき、目を合わせようとすると、女の方は、目をそらして行ってしまいました。母は少し悲しそうな顔を

して再び機械の方を向きました。私はそれを見て怒りと悲しみが混ざったような気持ちになりました。結局、機械には認証されず、グランドスタッフの人に助けられました。私にはその出来事が印象強く、時間が経ってもその出来事が忘れられませんでした。十二時間のフライトを終え、カナダに着くと母の友人がお出迎えてくれました。

到着して数日したある日、私たちは近所の市場に出かけることになりました。市場をまわる間、私は、母の車椅子をおしていました。すると、通りかかった人と目が合いました。私は、空港での出来事を思い出し、「また目をそらされるのかな」と不安に思いました。しかし、なんとその人は私と母を見てほえんでくれたのです。私は、とてもうれしい気持ちになりました。他にも、買い物を終えて帰ろうとすると「good luck」と言いながら手を振ってくれる人もいました。うれしい気持ちと同時にやはり、空港であった出来事が思い出され、忘れられませんでした。カナダでの旅行を終え、次の目的地であるアメリカへ向かいま

した。
アメリカでは、ラベンダーの優しい香りに包まれたラベンダー畑を訪れました。たくさんラベンダーの中に一つの小さな小屋がありました。中には、石鹸や香水、クッキー、アイスなどのラベンダーを使って作られた物がたくさん売られていました。私達がそこで買い物をしていると、レジにいた女の人が紫の小さな紙袋とラベンダーの花束を母に渡しました。紙袋の中にはラベンダ

ーでできたはちみつや保湿クリームなどが入っていました。女の人は「これはキャンサーバッグといって癌患者さんにプレゼントする物だ」と説明してくれました。私は、なぜ女の人がこんなにたくさん物を無料でくれたのか分かりませんでした。女の人は、家族を癌で亡くし、その経験からこのサービスを始めたそうです。母は、涙を流しながら女の人に感謝を伝えていました。カナダのときのように女の人も、「Thank you, good luck」と笑顔で手を振り、見送ってくれました。私もまた、うれしい気持ちになり、笑顔で手を振り返しました。

私はこの旅行で、日本と海外での癌の捉え方の違いがあると気づきました。日本では、私が前まで感じていた「可哀想」や「辛そう」などという後ろ向きな捉え方の人が多いです。しかし、海外では「頑張る」などの応援するような前向きな捉え方の人が多かったのです。私は、決してどちらの捉え方も間違っていないと思います。日本の共感や思いやりのある気持ちは患者さんに安心感を与えることができます。しかし、それが行きすぎると患者さんも後ろ向きな気持ちになってしまいます。だから、私は、癌に対して前向きな捉え方をしてほしいです。そうすることで、患者さんは心を開いて生きやすくなるはずです。癌は、患者さんやその家族に対して悲しみやこどく、不安などの負の気持ちを与えます。しかし、私はマイナスなことばかりではないと考えています。もちろん、癌にならない方が絶対に幸せですが、私は、自分の経験を通して家族がいる幸せや大切さを改めて感じることで

きました。だから、私は、この作文を通して「癌になることはマイナスなことだけではない」「病氣と闘っている癌患者さんに対して捉え方を少しでも変えてほしい」ということを伝えたいです。母は以前、「病氣をかくすつもりはない」と言っていました。私にはその時、その言葉の意味や理由がよく分かりませんでした。しかし、捉え方が変わった今ではその言葉は輝き、素敵なものだと感じます。

神奈川県PTA協議会会長賞

「わたしのはなし」

横須賀市立長井小学校

二年 まきの さやね

わたしは、どうとくのじゅぎょうで、「おとうとのたんじょう」というお話をききました。そのあとに先生が

「お家の人からもらったもの、どんなものがある。」

とみんなにしもんしました。みんなは、ゲームやおもちゃなどいろいろなものをこたえました。先生は、

「すべて目に見えるものだね。」

といました。わたしは、目に見えない大切なものはなんだろうと、考えました。すぐに思いうかんだのは「いのち」でした。

わたしのひいおばあちゃんは、わたしがお母さんのおなかにいるときに天ごくへいってしまいました。でも、わたしのひいおばあちゃんは、すごいです。わたしがお母さんのおなかにいることは、まだ言っていなかったのに

「おなかに赤ちゃんいるの。」

ときいてきたみたいです。おなかも大きくなっていないのにわかっていました。そのときひいおばあちゃんはいんしているときで、九十九さいまで生きました。わたしは、ひいおばあちゃんに

会ったことはないけれど、生まれてくるわたしの「いのち」をかんじてくれたのだと思います。天ごくへいってしまったけど、空から見まもつてくれていると思うと、うれしいです。

わたしのおじいちゃんやきゆうきゆう車で、人のいのちをすくうしごとをしていました。まだ小さかったのであまりおぼえていないけれど、おじいちゃんの家には、きゆうきゆう車といっしょにうつっているしゃんがかざられていました。かっこいいし、すごいと思いました。わたしの三さいのたん生日に天ごくへいってしまったのはかなしいけれど、おじいちゃんやんの分まで元気に生きたいと思いました。

わたしのまわりには、天ごくへいってしまった人がいるけれど、わたしがうまれてくることをたのしみにまわってしてくれたんだと思います。だからいのちをもっともつと大切にしたいと思います。みなさんもいのちを大切にしてください。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

「生きている奇跡、出会った奇跡」

川崎市立宮内中学校

三年 向井 美結

「めっちゃ奇跡じゃん！」

仲の良い友達と同じクラスになると、そう言い合う私達。長い間一緒にいるのになかなかなれなかった私達にとってのその出来事は、とても嬉しいものでした。

ある日、テレビで「人との出会い」についてまとめられた特集を目にしました。軽く聞き流していた私ですが、最も耳にスッと入ってきた言葉は、

「親友と呼べる人と出会う確率は二十四億分の一である」

という言葉です。この数字を聞くと、今一緒にいる友達と出会うこと自体が当たり前ではなく、奇跡なんだと気付かされます。そして、私と友達は、同じクラスになれるかどうかよりも、もっと何倍も確率の低い奇跡が起きていたことに、驚いた一日でした。

しかし次の日、テレビで目にしたのは、自殺によって亡くなった人のニュースでした。昨日の私は、今の人生での出会いの喜びについて学んだばかりだったこともあり、なぜ人生が嫌になってしまうのか、私とそもそも生きる環境が違うのか、見当がつかま

せんでしたが、私にとっての大きな学びになると思い、調べてみました。

インターネットによると、多くの自殺は、様々な悩みにより追い込まれた末の死だそうです。絶望感、孤独感、諦めなど理由となる感情はたくさんあり、きっかけとなってしまいう人物も存在しています。例えば、いじめでは一瞬の悪い気持ちでも言葉一つで簡単に人を傷つけてしまうのが現状です。「死ね」や「殺す」などの言葉も、今まではバラエティー番組で使われていたり、日常でも遊びで使われていたり、こわい言葉も身近になってきてしまっています。いじめる側は、ほとんどの場合、悲しさをもつことはないけど、いじめられている側は悲しい気持ちを一人で抱えていると思います。それが孤独感となり、自殺をしようという考えへとなってしまっているのではないのでしょうか。

このようなことについて学んだ私は、この現状について、身近な人が寄り添ってあげることが大切だと考えます。悩みをもっている人にとっても、その身近な人にとっても、相手に出会えていけるの今は、何十億分の一の奇跡です。奇跡によって生まれたこのいのち、この出会いは、寄り添い合い、お互いの存在のありがたみを感じることで、ようやくあるべき姿へとなるのだと思います。

このような命に関する助け合いではなくても、身近なちよつとした教え合いも、立派な出会いが待っていると思います。ドラマでよくあるような、困っている人に手を伸ばすシーン。これをき

っかけに生まれる奇跡の出会いも、きっと素晴らしいものになることでしょう。

これらの出会いを表したのが「ご縁」という言葉。あらゆる奇跡的な出会いは、この言葉によって表現され、結婚関連やビジネスなどで使用され、意外にも昔の人は出会いを奇跡として捉えていたのかもしれませんが。

これまで挙げてきた例のように、すべての出会いがプラスの気持ちになるとは限らないかもしれませんが。私達が生活していく中では、「この虫嫌だな」「この人はあまり好きじゃないな」「学校に行きたくないな」などと思うことは多々あると思いますが、これらがなかったら今の人生で自分として生まれていなかったかもしれないな、これまでの運命が変わっていたかもしれないなと考えると、一期一会の精神を大切に生きていけば、多少嫌な出来事も受け入れられるのではないのでしょうか。

人と人との出会いだけでなく、この地球で生まれ、大切な人に囲まれて生きることができているこの瞬間だけでも奇跡だといえると思います。ご飯が食べられること、晴れたり雨が降ったりすること、風が吹くこと、夜になると眠くなると朝になるまで眠ること、どれも毎日の些細な奇跡の積み重ねです。今、十分に空気を吸い、心臓が動いていることも奇跡かもしれません。そんな奇跡だらけの生活で、友達と仲良く話せたり、学校で新しいことを学べたり、美味しいものを食べることができていたりする今は、とても幸せに感じます。だからこそ、今こんなに素晴らしいの

ちを持っていくことの感謝を忘れずに、この人生といのちを大切にしていこうと思います。

優秀賞

「うちのクレマちゃん」

川崎市立下布田小学校

二年 たかはし りお

クレマはわたしのお姉ちゃんです。わたしが生まれる前から家でかっているワンちゃんです。

わたしが赤ちゃんのころ、わたしのいちごを手からとっていつでもぐもぐ食べるくらいしんぼうでした。だっこしようと思ったら、けられておながいたくなりました。でも、小学校に行くときにはわたしよりはやくじゅんびをして、見おくりにきてくれました。いつもえがおでかわいかったです。クレマは、ママが大すきです。いつもママにだっこされていてしあわせそうでした。

十才のときに、心ぞうびようになりました。十二才のある日による、ソファアの上でたいへんなことがおこりました。ソファアからおちてしまって、体の力がぬけてしまい、いきができなくなっただけです。わたしは、お風呂に入っていたので、たすけられなかったことをすごくこうかいしています。ママとクレマは、きゆうきゆうびよういんに行きました。二人ともすごくがんばっていただけです。入いんしてしまい、さびしかったのですが、たいいんしたときは、ほっとしました。みんなしあわせそうでした。

よくがんばったねと思いました。

それから一年みんなでたいせつにクレマをまもりました。でも、またもつとたいへんな日が来てしまいました。思いだすのもむずかしい日です。とてもくるしそうなクレマに、わたしは、見ているだけだったので、もつとなにかできなかつたのかとまだ思っています。よ中に、ママにおこされて行ってみると、クレマがなくなっていました。すごく悲しくて気もちがおさまらなくて、とてもイヤでした。クレマを空へおくる日も、すごく悲しかったです。でも、ほねはものすごくかわいかったです。

いのちは、たのしいこともあるけど、びようきでくるしいこともたくさんあると思いました。でも、びようきの中でもクレマはえがおでした。それを見てわたしもがんばろうと思いました。

いのちってなんだろうと思っていました。どうやってたいせつにしたらいのか、わかりません。でもクレマは、あきらめずにじぶんのいのちをたいせつにしていたと思うし、みんなのためにがんばっていたと思います。クレマとの生かっで、その気もちをかんじることができました。クレマのようにがんばればいのちはなにかがわかるかもしれないと思います。

ずーっと空の上で見まもってね。クレマ

優秀賞

「しょうらいのゆめ」

伊勢原市立竹園小学校

三年 森山 心陽

わたしには、妹が2人います。めんどろを見たり、けんかしたりおこったりする時は、たいへんだなあと思うけど、いっしょにあそんだり、あまえてきたり、うたったりできるのは、すごく楽しいです。そして、もうすぐ赤ちゃんが生まれてきます。こんどは、男の子の赤ちゃんが生まれてくるので、うれしいし、だっこできるのがたのしみです。

夏休みに入って、わたしは、お母さんといっしょに、病院に行きました。赤ちゃんのしんぞうの音と、赤ちゃんがうつるモニターを初めて見ました。おなかの上にゼリーのようなものをつけて、まるいきかいのようなものを動かしたら、モニターに赤ちゃんがうつりました。かおやほねや動いている赤ちゃんが見えました。ふしぎな感じでした。心ぞうの音は、わたしより速かったです。

また、家ぞくでキツザニアに行った時は、赤ちゃんをお世話するかんごしさんのお仕事たいけんをしました。おふるに入れたり、きがえをしたり、おむつをかえたりしました。こんど生まれてくる赤ちゃんが男の子なので男の子の赤ちゃんをえらんでやりまし

た。おふるもだっこも、小さくて、おとしてしまいそうだったので、むずかしかったです。

わたしは、しょうらい赤ちゃんのお世話をするじよさんしさんになりたいと思っています。だから、またキツザニアに行ったり、赤ちゃんのお話をしたりしながら、じよさんしさんの仕事のこともっともつとしりたいです。

優秀賞

「望み、望まれる」

伊勢原市立伊勢原中学校

二年 清水 葵

いのちは望まれて誕生するもの。望まれるべき、尊いもの。そう教えられていましたし、私自身もそう思っています。しかし、望まれて生まれてくることができなかつた、あるいは望まれていても産まれることができなかった命もあるという事実。

私はこの事実を知りながらも、なんとなくふれにくくて遠ざけてしまっていました。今まで、いのちの大切さについては十分わかっているつもりでしたが、いのちの責任についてはあまり考えたことがなかつたことに気がつきました。

いのちの責任。そう聞くと私は子どもに対する親の責任を思い浮かべますが、自分のいのちに対しても責任があるという意識が足りていなかったと思います。人と人が必ず関わり合う、必要とし、必要とされる社会。一人は必ず誰かに望まれて生きていると思っっています。望まれて生きている「一人」が、自分の生や存在を望めなくなってしまうというのは悲しい。辛い時こそ、望まれている自分をイメージしたい。絶対に、心当たりくらいはあるでしょう。

私の最初の心当たりは家族です。書き出したらきりが無いほど、「望まれている」「必要とされている」といつも感じています。自分を望む、好きでいるために、人を望み、望まれる。この循環とそこに生まれる愛を、自分なりに紡いでいく。これが私にとつての「いのちの責任」です。

最初に挙げた、望まれて生まれてくることができなかった命について。望まれなかつたのではなく、少しタイミングが早かつただけです。望まれない命なんて本当はひとつもありません。

優秀賞

「命の尊さ」

神奈川県立横浜立野高等学校

二年 藤森 昂

私は、最近、テレビのニュースを見ていて、よくこんなことを思う。「自殺や殺人事件に関するものが多い」「なぜ、毎日こんなにも悲しい事件ばかり起きているのか」と。突発的な攻撃や反社会的行動などは当事者の心の問題が主な原因だと思うが、私は、事件を起こした大人や子どもたちが、命をどのようなものとして認識していたかということが気になった。

日本人の死因について調べてみると、15～39歳の年代の死因の第1位は自殺となっており、15～34歳の若い世代の死因の第1位が自殺である国は、先進国（G7）では日本だけである。我が国の自殺者数は、近年減少しているが、以前として年間2万人を超えており、国としても未だ深刻な問題なのである。

では、若者が自殺を考えるようになる動機は何なのか。主なものとして、学校での問題と家庭での問題がある。特にSNS内で起こるいじめや、学校、家庭、職場などでの人間関係による心の病が原因であることが多い。自殺は突発的に起きるものと思われがちだが、実は、そこに至るまでには長い期間の深刻な苦悩があ

って、些細なことが引き金になっているのだ。

一時の感情を重く受け取って、「苦しい、疲れてしまった、生きていたくない」という絶望的な精神状態に陥ってしまった、その苦しみが永遠に続くという思い込みにとらわれて、自ら命を絶つてしまうのはとても残念なことだと私は思う。しかし、思いつめるほどの悩みがあっても、その思いを語る場所がなく、インターネット上の掲示板だけが、唯一本音を言える場所になっているという人も多い。インターネットの中だけでなく、実際に顔を突き合わせて悩みを話せるような信頼できる人間関係を構築できる場が必要だと思う。

また、人間の心の奥底には、生き方に影響を与える実感的基盤というものがあり、生きている中で、感動をはじめとした様々な体験から得られるものがある。私は、今まで、障がいがある人たちと自分との間に線引きをして、障がいを自分事としてとらえてこなかった。しかし、怪我をして身体が思い通りに動かなかった時、不自由さを実感し、衝撃を受けた。世の中には、その不自由さを受け入れて一生懸命生きている人たちがたくさんいる。それぞれの不自由さを個性として受け入れ、前を向いて生きていくことが大切だと思った。

私たち一人ひとりが己の身体で実感し、それによって見方や行動が変わり、初めて「命は重く、尊いかけがえのないもの」だと認識できる。各人が、生物の多様性や死の不可逆性について正しく認識し、自他の命を尊重できるようにする必要があると思う。

優秀賞

「消えてしまう前に」

神奈川県立相原高等学校

三年 須山 ゆら

「死んじゃったかもしれない」

自室で寝ていた私に、動揺した母が言いました。その日、私は大切なのちを失ってしまいました。

2018年、3月。桜文鳥をお迎えしたいと母は言いました。桜文鳥は白、黒、灰色の羽と赤いくちばしを持つもちもちとした小鳥です。母は前々から動物を飼いたいと思っていたこと、とても可愛らしくて、お世話も責任を持って出来そうであることを家族全員に熱弁していました。父、兄はきちんとお世話ができるならと承諾しており、私は小さくて可愛い家族が増えることがとても嬉しくて、すぐに賛成したのを覚えています。程なくして鳥籠を買ったり、置くスペースを確保したりと準備をしてお迎えしました。桜文鳥はピ、ピと鳴いて可愛らしかったため、「ピコ」と名付けました。初めて名前を付けた私はピコが可愛くて、可愛くてたまりませんでした。手に乗ってくれたときはふわふわで温かくて、「生きています」と強く感じました。その年の8月。夏休み間にたくさんピコと遊んで仲を深めました。少し怖がりでした

が、好奇心旺盛で甘えん坊な子でした。鈴やシャーペンに興味を持ち、隙間を見つけると喜んで入っていく子でした。特に長袖の服を着ているときは袖口から入ってきて、幸せそうにしています。裸足でいるときはそれに求愛ダンスをしてくれて、手で体を包むとうとうととしてくれました。放鳥する中で踏まれないように、窓から飛んでいってしまわないようにと注意を払うことで動物の命を預かる責任感が身につきました。そして、手で感じる温かいのちに言いようのない尊さを感じました。

時は流れ、2024年4月30日の22時頃。鳥籠にいるピコに、

「おやすみ。良い夢見てね。」

といつも通り声をかけました。眠そうにしながらも、こちらを見つめてくれました。眠りについた23時頃、母がピコを抱えてきました。亡くなってしまうかもしれないと動揺していました。飛び起きて母の手の中のピコを見ると、硬直していて動く様子がありませんでした。母も寝る前に声をかけようと鳥籠を覗くと、すでに冷たくなっており床に転がっていたそうです。ピコを撫でながら母と考えていました。なぜ亡くなってしまったのか。母は餌に入っていたフルーツが原因なのではないかと言っていました。しかし、素人である私達には分からず、ただただ亡くなってしまったことを悔やんでいました。それでも悔やんでばかりいられない、とこれからのことを考え始めました。できるだけ近くにいたい。調べ、考え、自宅の庭に埋めることに決めました。母が大切

にしている沈丁花の近くに穴を掘り、ピコを入れ、フルーツを抜いた餌を口元に添え、埋めました。温かいのちが突然消えてしまい、心にぼっかりと穴が空いてしまいました。そこから穴の埋まらない日々を過ごしました。家に帰っても私を呼ぶ声は聞こえず、小さな温もりも感じず、悲しくてたまりませんでした。

その時、私は気づきました。大切なちがいつもそばにいるとは限らないということを。突然亡くなってしまった、という経験を初めてした私には後悔がたくさんあります。もっと一緒に鈴やシャーペンで遊びたかった。もっと長袖に入れたら良かった。もっと色々なものを食べさせたかった。もっとたくさん話しかければ良かった。もっと、もっとと溢れてきます。亡くなってしまった今では、できることは何もありません。そのため、私は相原高校の養鶏部員として、鶏を後悔のないようお世話しています。亡くなってしまいう前にできることを考えます。そして、家族、友人にできることを考えました。挨拶をすること。感謝を忘れないこと。労ること。正直に話すこと。ピコは私に大切なことを教えてくれました。ピコの鳥籠が置いてあった場所には餌と水と写真を置きました。そして私は毎日声をかけています。

「いってきます。ゆっくりしてね。」